

911.3
バ
人

芭蕉翁
芭蕉翁
芭蕉翁
人

芭蕉翁俳諧集 下

之祿五申年



こんろやふり賣るる己の形
吹揚るるふれ音もれ
帰る鴨うつらぬ鴨とささるる
七翫心といふ
月
為
河原のせりる砂も

言海をぬくかくくまはるる世血
切まると老をいもは匠言家
七の餅はく神るす思ふ
生は藻り焼く燗ふとまを
日善そ疎ふ松の切うけ
ま白丸焼たよ飯をつま向て
泪よ老をもくうは月くらすり
古根此念仏り櫻る花土を
小城は稿の中よまをくをもち

翁 高 翁 高 翁 高 翁 高

杖くうつた既ら砧上よなり
猿りふ浪や姨花の月
花は又垣根もくうつ嵐宿
功ちたもと花初のりりき

翁 高 翁 高 翁 高

名
舟のしきと舟子のんはよまを
いつこのかたは花梅の名をえ
紫垣のしる花が破まをり
讀ちえんり椎ちくをいり
まあのをあひひこるる樹のを

翁 高 翁 高 翁 高

松岡のそんくつと夜半る
 捨子かみくと告おたつ
 湯を水の底より集る水桶
 一も下志より當るを
 小洞市の時よりみざるまひ人
 痛うなるれちる心
 出さ口より涼しい月此入る
 何の棲より故よりらめ
 ニ乃丸の光うやく金屏風
 翁、考、翁、考、翁、考

雨と上つてあんの朔日
 さらくと茶漬の飯を食ひ
 以上りてかす 若草
 氏神の忌とまきと咲拵
 ちり井よりし伸るま柳
 考、考、考、考

之祿六酉年

水仙をえりるもまじくはらり
 うきの細月より元くいれり
 わの梅もみさき梅もとうり
 引き寄せる衣洗の月
 梅よりぬ糸仙のつらあひ
 仁といひしはしこころ白き
 初斗入よふ糸とこころを
 志すた風はあはれつら
 めつらき書行をえりん

路通
 李当
 芭蕉
 龜仙
 泉川
 札筆
 台
 芭蕉
 他

形もとの一いつはの子
 地里も持つてくる印袴
 餅も水へたくぬ月のさ
 てらくともふ廣木の家の者
 一むきほくろ一の鈴
 ねふー「境をこまら物世ひ
 ねもさほ「しらぬ手
 桂様やまよへんあまの真
 雪のふもまはよくはるま風

芭蕉
 仙
 川
 芭蕉
 芭蕉
 芭蕉
 芭蕉
 芭蕉
 芭蕉
 芭蕉

石の上残しき世よ承りて
彼岸より入るを鏡にさし
ひききふ申くは子よ似るまじ
いとぬおとしの志しし海鳥
之粒のほつきてはる衣をま
人の情も柳よはれあはく
花はく菊さく秋の志しき
院代衣さるる本るの松の葉
月の宿きるをさしとらひし

蕙 通 仙 慈 通 川 岩 仙 蕙

朽ちる亦心を底つくり
唐人の志しぬ詞片の肌を
しそく借よ方をかへる借
詞立しきしふらえぬ
塔のわらもはちうむ
咲ハ花のくくく
赤まじりらも梅家まじり
花さるる静く舞をかせ
かくしりしむふ申くは声

皆 蕙 通 仙 川 通 蕙 川 岩

花ぬきしと梅あしじり白玄代
 襟きつしき入口波松
 掃きせくほろききをかきん
 石のくろくしりまきと抱きき
 月移り老の影をとりかき
 つくしと穂のかつと芋畑
 時の子の待意をとり秋の風
 何うねほちす念の西影
 あらなれく落ゆきとる田の端
 川 玄 蕙 通 川 玄 蕙 通 川

ちよとのうぶ飛のゆきよ
 振とて杖あきききあむの繋
 舞の利み鼓をとり町とむろめ
 ちよりの酒乃幸ことけり
 月さきこよむとんぬるのち
 狩をむと磁のまよとちくして
 ちよとさぬを君をききと
 花の影をのほしとせらる
 菅束のゆ乃よと持ぬこと
 川 玄 蕙 通 蕙 通 蕙 通 川 玄

浦をり清らなるまのま
志斗にえふ水志札
隙生捨著なる守に連の内
二のしつる心実きまぬ風
元道月まゑえりくふ砂の雲
杳おくまじる田の中の少田
子規涙くやうと啼つ雁ん
已らまのおとしくき世一人
けなるといふむとよひなき

川 慈 色 川 良 色 慈 良 川

赤きくあつふ中の戸は山を
松の園まはるちものほ月ね
吉らのをみまに岩のうま
火を林たぐふ根の洞く冬籠
志まおふりの心けり
おとらぬる人の白髪を海に
けり花まきる草のしら物
入と出てあまの昔おしもの奥
何のなまをくまのしらま

川 慈 色 川 良 色 慈 良 川

五人扶持きうてきさうし 柳舟

野坡

日よきしくしきさうの ちき

芭蕉

猿曳の月をかよふ山こくして

そこのらをとのりきふ 雄子の抱ひ

坡

晴ふちうてもあもぬ水の意

徳利よりあて 砂と買てし

丸ニ手 籠りて 籠へ籠りて

境のらるゆめくし 境せぬ

き白く ねと 櫻さるるの寒天

坡

うま世のうしこくして 鐘まき

蕉

波 腕よりあふと 句 搦たまひ

寂入せよと ちきさうして 泣

坡

鶯双をえ ちきさうして 秋あて

ちきさうして ちきさうして 月影

蕉

ちきさうして ちきさうして 海なる

ちきさうして ちきさうして ちき

坡

笑ふよ 十府のまに 荒あはれ

ちきさうして ちきさうして ちき

蕉

おらくととらまめ水よまの風
徒忠やトリノ日ちくく
行葉よくせよとみ共も存あゆ
や子味等の灰ふきまひて
一握くくさ何つめー飽味
く少し形等のころさとし
おも黒もとしひみ申たきし
むし一のさゆ知人けき若みやむ
市原よそこしうとせうちく子

・ 蕙 ・ 坡 ・ 蕙 ・ 坡 蕙

神おむるをおのさるとん
月影よ小半仲るの誘むつせ
若ら麦うらむるを天たる水き
をらくと桐の家ふたふ水神
半甘そあお花さの穂る古日
やくくとう記おさうして髪友る
猫のおしく家人そ恋ーし
何のさのあゆめさまふ何さ
掃めれくそくくの疎

草 蕙 坡 蕙 坡 ・ 蕙 ・ 坡

水着女子館の流石二漢抄

柳亭の流石七川株

尺三寸の流石朋友

刀也抄下三心抄

金書抄流石月

流石抄流石抄

上抄下抄抄抄抄

抄抄抄抄抄抄抄

抄抄抄抄抄抄抄

抄抄抄抄抄抄抄

湖風

弱

流

利

史

風

弱

流

牛

道

流石抄流石抄

尺三寸の流石朋友

刀也抄下三心抄

金書抄流石月

流石抄流石抄

上抄下抄抄抄抄

抄抄抄抄抄抄抄

抄抄抄抄抄抄抄

抄抄抄抄抄抄抄

抄抄抄抄抄抄抄

良

端

風

斗

素

弱

道

良

風

知部 徳部 徳部 徳部 徳部
おのり 一 九 新 新 徳部
徳部 徳部 徳部 徳部 徳部
部 下 徳部 徳部 徳部 徳部
徳部 徳部 徳部 徳部 徳部
部 下 徳部 徳部 徳部 徳部
部 下 徳部 徳部 徳部 徳部
部 下 徳部 徳部 徳部 徳部

史部
法部
徳部
部可
部圍
部可
部可
部可

部 下 徳部 徳部 徳部 徳部
部 下 徳部 徳部 徳部 徳部

部圍
部可
部圍
部可
部圍
部可
部圍
部可
部圍

社をぬ〜次音の月館

志を〇の上す〜風を力よ〜

お〜〜け〜ま〜言ま〜る〜ん

よ〜め〜そ〜世〜院〜家の〜血〜

る〜ま〜え〜お〜び〜ほ〜ろ〜く〜む〜の〜

る〜際〜ま〜を〜ま〜ま〜ち〜れ〜白〜い〜お

魂〜て〜か〜み〜〜か〜め〜め〜み〜り

境〜と〜れ〜り〜咽〜か〜ま〜の〜ゆる〜花〜

ふ〜ら〜る〜ま〜や〜つ〜ま〜〜八〜字〜様〜な

圃

邦

可

里圃

乙あ

圃

里

圃

圃

高國をさきまて馬と收束して
 日記つまきし一帖の紙
 猿夜やきまきり日の形ゆり
 又跡をかきく安藤の鹿鳴
 音はつんたつぬの伯母も懐しく
 え米をのり酒を飲む教
 焼きて庭又熟する善の月
 おとせまると別室をた風おと
 高知年を飯詰大まよきかむて

子葉 子葉 子葉 子葉 子葉 子葉

高國をさきまて馬と收束して
 日記つまきし一帖の紙
 猿夜やきまきり日の形ゆり
 又跡をかきく安藤の鹿鳴
 音はつんたつぬの伯母も懐しく
 え米をのり酒を飲む教
 焼きて庭又熟する善の月
 おとせまると別室をた風おと
 高知年を飯詰大まよきかむて

子葉 子葉 子葉 子葉 子葉 子葉

秋の月よ十たをあり
秋をよやさうもに給
存あり 鴨のさやうあり
抱して 松系 廣知る 明
何人さう 徳 奥くさるなり
ふきのさやう 風うう 降出
訪きをもく 櫛 糸のそ
松 赤て 赤い 糸をたのや
志をさ ぬく とき 世 絶る

聖明 松竹
考 意 兼 松 竹 末

元禄七戊午

牛跡山村のさくらもや五月も
 春は吹きさら梅樫のふ
 一牧の遠くは色麻村を
 柄きん小庵とちよと柳きし
 月影よ道の海角の下を
 堤おきては田の中のこと
 家くちちよよ此京乃弓まで

諷牛
 去来
 芭蕉
 惟然
 文章
 支考
 東

秋を月よすわさあり
 秋を月よさうまに給ふ
 存あり 鴨のまわしあてある
 抱して松系廣知る明
 何ふ人まら徳久くさるなり
 ふきの志あり風うら又降出して
 訪きくもくは御袋のそと
 松樂あてふは指伝をたのや
 志もふもぬくくき世絶あり

竹
 然
 明
 考
 蕉
 然
 文
 考
 東

道七取まらぬ此のふかしの
 名 木交を張子のむしり子取の
 川 舟はあうそととくはる
 塔 下り上りまきまき 白や
 高きもゆる川の子孫く情ん
 茶 茶時の雨のめいりま
 う 此は忠上下のふれ此席
 腰 又杖さす 宿のふれま
 言 東道月よしの形のきり

然 慈 来 川 考 然 明 考 草

ちくくきれりる物
 朝の月起くまを物わさ服
 ちかおちりし意を
 遊生におしりけはくは編
 加減をせしふ 浅漬の桶
 ちりそくるま 井下深氣よ
 ちりもさうら ちり髪を結
 ちり物て中女の客をえせる
 犯後のお場をまきりて出る

慈 来 川 明 然 慈 来 川 明 然

イ 念心して謙の徳を奉る

何の事か — 礼敬大井出

容 — 謙の徳を奉る

礼 — 謙の徳を奉る

律 禮の徳を奉る

禮 — 謙の徳を奉る

八 礼の徳を奉る

亦 謙の徳を奉る

物 謙の徳を奉る

考
慈
流
考
統
流
慈
統
考

半日浴、もつんの連、よさをとて
日癖、よさをとて、まのこころせ

明 然

秋ちのふこころのよるや田あま
志とらふふけを梅子の家
月ある夜ありの灯籠くらべて
ちよと澤よとらふこころ返る
階まゝのまゝいそまゝの一物
よのむらふこころ秋あまも

芭蕉 本節 惟然 支考 芭蕉

夕合とくして隣の帳をまら
河のよおこも一斗さぬ大まは
岩くて菊のつらなるをささ
うらくみ虫のせしむねわらう夜
佛極の隣子よ月のさしこ
梁うららのさなふ秋、うせ
八朔の礼あそこくはのこころ
亦あゝの舞の甘くしつと
あまはる地ほしあのむる不

考 然 芭蕉 考 然 芭蕉 考 然 芭蕉

しらあふらるる運志の美る居
結うけくぬ縄さぬ美の恒
是ハ氣収て何すさの均也
年⁺徒しちらさたわつら信せそ
かゝすたよりをもさちやうきく
仍⁺燈の上より白交顔はき
あふら比路をもさうきくとおく
半⁺部あふぬ西よぬもつ合やう
此の根をゆへぬのさうら

然 美 考 然 美 考 然 美 考 然

ちうくくとき一の枇杷と前山
娘と娘とくくくくもこく
客あふらなうきくてこそら大雄の居
さうさうさう物さうさうさう
ちう⁺結てあふらりの物りよ
本よ十をもと柳をもさうさ
備⁺比⁺申⁺稿⁺は⁺る⁺そ⁺さ⁺ん⁺冬⁺
桶と鹽しあうさうさう
投⁺と⁺ら⁺も⁺と⁺ら⁺い⁺て⁺猫⁺の⁺お⁺あ⁺じ

考 然 美 考 然 美 考 然 美 考 然

そよ物をかふる 掃除日 考
花雪をみち指す まるくせし
つしみの肥る 赤土の山 然 意

阿まきくて末は海ゆり 聖令代 猿 雖
鶴のうららをも年ら 西平の穂 色 意
秋月夜から 薙みゆく 追ま 配 刀
美草のふし くら 暖み 危の 敵 中 意
かゝると 柿をおろ 所 雑 ぬ ち 芽

新屋さくし 袂う 夏る 水 卓 袋
燭臺の 小きま つか ぬ ち 意
名をと 地 下 へ 之 こと 判 意
焼飯は 刻る 中 の つ ぬ 意
おもひ 明 かり ぬ ぬ 晴 意
けい ち ち ち ち ち ち ち ち 意
湖水 徳 西 月 ち ち ち 意
眼 ち ち ち ち ち ち ち 意
旬 ち ち ち ち ち ち ち 意
誰 袋 刀 意

山崩りて山伏村の一かまへ
 焼きして葉をりりたのた
 七かきさう原まの風ひ知
 十 塚割の川際のもつと上て
 日あくくくくくくくくくく
 大急の流のもさ此果とれま
 白し此物乃とてさ血のまら
 一神の代も持もる酒の物
 葉 班 刀 禰 葉 芽 袋 葉

盃の底もちあつてまは
 燈此草を包ゆ二のたかまて
 靴のこゑの柳もものまな
 葉もあまそめぬとせてま
 くまゆまこれくんと三月
 神さか供も持て上るそ
 ちま〜〜岸もやまも民士
 衣着て旅するもあ静なり
 奥へといふ家あつてま
 葉 葉 袋 葉 葉 葉 葉

年々婦もそのまゝ横しき
 けなれはるまの後に六尺
 大あしな子梢引よる糸の陰
 糸の調子此きまじはれは
 種 刀 袋 籠

つぶくぶく糸帯をもちし楳のうた
 牛のこつ斗を初あしり
 卯月よ鶯さびに尾をふあめて
 すまじちるちるふくと豆の府もあはる
 色巻 後籠 古糸 音芝

大八の角さしものころ細小詠 猿籠
 師をこの教よ編いとしさるす 色巻
 窓なる水仙さびしく川表 卓侍袋
 卯中へ年の経ちとをにやる 九節
 娘入のよをて娘ま門まきり 芝
 杖と葉を後を阿つうりてたぐ 卯年
 一くくお糸ささきさる月おみ 籠
 鶯物なり 溢るるの 籠
 大さのまじりて因もらぬと 籠

若らまを移をふふふかかむらの視
 之はよく又書くおく店の端
 後持ふりて中社母の泣き
 去れよ心のゆいゆいの田へ
 びらうやらまを記するのあつせ
 旅筆をに雪の夜つづきおまを替
 習ふのりる子を笑はる僧
 冬枯乃丸の母をむすおたひ
 をまよくいさむか居風を此編

芳 隆 蕙 唯 芝 咲 蕙 翠

右

持継の一乃ちよをりり
 あふつつをききつはるハア
 音の口入るるはる道り見市
 糸の天々ころのぬるお小茶漬
 弓の阿まはまさんなる弦のま
 ちよまをるまをてぬの杉
 又明よちつを一編をつるをかす籠
 文後一しるるを顔痛やまをり
 けくくをまをりておくおたのつ

芳 隆 蕙 唯 芝 咲 蕙 翠

け杖を腰のまゝもがらして
薄き供のせいのこもなり
のふゆともふ杖のぬきの下
芝切入てるを 芝月まの
とまを片にぬきぬき
其の日はまゝの——め
代 雑 考 芝 家 為

殊る杖と袴まきしる夜半を
縛るふなりとんもさむ結
芝 葱

夕月のまゝ杖はうまなり
とす杖いろよまゝ 雑 葱 風 麦
此もまはめ二人連らるる 虎
こまかけたくまれの明茶の 若 藤
燦きを目利のくちよかき
つらてつらつめ 餅 口
大木の杖を枝のらむ水
野にまをくまにた 儀 物
山ふーよついでまをさす 札 あり
葱 藤 麦 竹

水噴ふふ日ちみれ 強くあそ
い運うけこえ枝の高ま 垣をれ
漸く今くちとよもる 乃ち銀
か減のこふちつとらと 此む
ちふ 紙をまくくくえ 此を
こちましてせむ 枝のふり
鈴夕の葉の隔もくくを 危の果
餌へちくちくさふり 此れ此れ
枯らちまふ ぬるさく 此れ 楠の枝

為 雅 考 皆 臨 芝 考

月又よいつしき 地せりあ
あるのゆりしき 枝の風
浪の小ちまをさる むら
懐よ 辰出ておく 花 小
いそ 此のさふあよむ 乃ち考
高 浪のさふり ぬく 乃ち 枝
根 也つさ 此よ 考の なく

考 装 然 考 臨 芝

秋の夜をふらふに
 月まらほさるる
 孤の山にそ風三
 意のゆる半のく
 胃はえまんと
 小袖を引して
 使やぶる
 かへし
 杖のま

意 車 洒 游 汎 怪 支 意 扇

ちあて
 杖のま
 野あ
 度は
 るか
 火の
 七
 足せ
 水

杖 意 扇 刀 意 扇 刀 意 扇 刀

白菊の月みまきくつんる塵^{ちり}
 ぬきふし水を流す 如月
 冷くと潮の片方をわけて
 何まきえせよま^まの^まの^ま
 小襖よせ太の鑑を古ひり
 とおちづく^う國^の 縁
 ぬまる 袖^の 親^の 代
 袖ふさくよ^の 親^の 代
 垣^の うちよつと^の 盟^の 礼^の 子^の 代
 芭蕉 園廿 詞廿 謂川 支考 特然 洒垂 金羅 何中

若る法のうちちちる小庵て火を焚
 ぬらぬよきはま^まの^まの^まの^ま
 酒^の うちよつと^の 盟^の 礼^の 子^の 代
 ま^まの^まの^まの^まの^まの^まの^ま
 夜^の 洗^の ひ^の ころ^の 所^の 言^の の^の 秋
 衣^の や^の ら^の 流^の ころ^の 所^の 言^の の^の 秋
 彼^の 岸^の の^の ぬ^の ころ^の 所^の 言^の の^の 秋
 ま^まの^まの^まの^まの^まの^まの^ま
 出^の 付^の 時^の 忠^の を^の ち^の 代
 芭蕉 園廿 詞廿 謂川 支考 特然 洒垂 金羅 何中

鑄のはむのりる常機

月氣のさへて師士のねのさ

杖一本と道の眼さ

那輪のされも袖のぬるさ

老のちのよぬか

餅あきる福のさるのさ

あぬるさの徒てかさ

田のあゝの泥連はあゝ

柳のさるさるのさ

中

川

女

花

花

花

花

花

花

かよふは流を橋よなきねを這ふは
 しとろよ志をも雲の空を桂
 浅くともさるしもた守は若
 高のうししれしめなる風
 此よきまは隣りのよ共連をせ
 清花口よ夜のまらむと
 上下の橋のたぐる川の音
 極田の中を鶴のくささはく
 小かまよふ断も通る打あき

女 慈 中 然 者 女 世 川 竹

鏡のはむしの百やる第機
 月影のまへて師士のねのふ
 杖一本を道の眼さし
 那羽のまはしも袖のあはれて
 老のちのしよぬかし
 餅あまいる福のあまの石さ
 あぬぬしの徒てかきしる
 田のあゝの涙連はあゝの志
 柳のまはるもよき

鏡 世 川 慈 中 竹

新田

この道やけ人川に秋の暮

芭蕉

池のりぬの木よこのま せむ

泥足

月をくむ若草のこをいよけ舞て

支考

小さなふも出て 水くむ

游刀

とらぬおぬ城をへてるうら

之道

海で痛のこま 腹癖

ち痛

けつぬさむの月夜之のま

酒量

塙のせはむよ何のき梅もる

睡止

線よりとまのまのゆるなる

侍然

種子の餅のゆるさささ

浪柳

兵忠力ありまか眠りせむ

足

かくはま 松風

蕉

をらくと山田の稲いさうい

痛

地蔵の埋む秋のうら

考

はるのまきかハ葉ふかち月

道

増飽のみのうつと しい

然

ちる花よ幕のま 止

止

所待切たのりき送支のんさ
き

芭蕉翁仙譜集下巻

此の芭蕉翁仙譜集六つり五廿菴
大徳おろしに改めたる所を
なよこの國の仙流井の仙人
去河をさるるより一
いふの世よこの世よあそふ人の
翁の世をさるるハさ教をあり
すれハこそ續杖素極逸傳忠
蕉翁の譜よこの風流佛社の所

願も衆生之心世之濁世の空法
 如王初言の如く我れも亦一
 なまの心かゝるに法之我
 こそ是は法之流の心也
 亦心同志の人をたせり
 亦く梓よちるにまよしを
 近江國甲吹山の秋風菴
 曾秋謹書

蝶夢子著述書目

- 近江國甲吹山の秋風菴 二冊
- 同 發句集 二冊 類題發句集 五冊
- 同 俳諧集 三冊 何諧名小鏡 三冊
- 同 文集 二冊 鉢敲集 一冊
- 近江國名録集 三冊 吉野此冬の記 同
- 近江國俳諧語録 二冊 遠江乃龍 同

